北方山草（39）：49-51. March 2022

バイカツツジ探索記

美唄市　**新田　紀敏**

もう 10 年以上前になるので昔話の類になります。記憶も薄れ、写真・メール・GPS の記録をたどりながらようやく当時のことを再現できました。ことの始まりは 2010 年（多分）会員の U 氏から渡された 1 枚の地図でした。

地図には函館市椴法華の市街地とその裏手の山が載っていました。林道上に 1 点印があり、「ここに 1 株あった」とメモがあります。少し離れた沢の中に斜線で囲んだ場所があり「行ったことはないがこちらが本場」とありました。情報はこれだけで、暗に「本場」のほうを確認してこいということだと解釈しました。その時は林道沿いにもあるようなので、そこを確認できればいいかと思い軽い気持ちでいました。

バイカツツジ *Rhododendron semibarbatum* Maxim. は 1870 年、マキシモビッチによって須川長之助採集の標本に基づいて記載されています（Maximowicz 1870）。高さ 2m ほどになる落葉低木で、北海道南部から本州・四国・九州に分布するとされます（五百川ほか 2017）。道内の分布は函館市の亀田半島部しか知られていないようで、ここが北限になります。

話は戻って衛星写真で確認すると、斜線の場所は道もないかなりの山の中でした。見たことのない植物なので、まずは林道沿いの株を見つけることだと思い、2010 年の秋に道南へ行った帰り林道を確認に寄ってみました。まず国道から脇道への取り付け部分が民家の正面へ向かっており、あたかも私道のように見えるので入っていいのかどうか迷うところから前途多難を思わせます。林道へ入るとすぐに道幅が狭くなり杉林の中へと入っていきます。道は悪く、脇道がありますがさらに悪路に見えました。結局この時は道があることを確かめた程度で退散しました。

翌 2011 年は春から道南へ通っていたので、春の道が乾いて走りやすい時期に「ここに 1 株あった」場所を確認に行きました。まだバイカツツジを確認できる時期ではなかったのですが、ツツジがあればわかるのではないかという淡い期待を抱いていたものの、それらしい物は何も見つかりませんでした。それでもその場所へ行くことはできるとわかったので良しとしました。バイカツツジの開花は夏なのでそれまでに情報収集して備えることにしました。

情報収集と言ってもあてはありませんでした。とりあえず道南で森林管理の仕事をしている昔の同僚に尋ねてみました。その結果はあっさりと、地元の人に聞いて知っているとの返事でした。どうやら春に見た林道の脇道を入り杉林の中を行けるところまで行くようでした。それ以上のことはわかりませんでしたが、衛星写真を見ると杉林の中に作業道があるようで、はっきりとはわからないものの方向さえ間違わなければ到達できそうでした。

そこで 8 月 17 日に衛星写真片手に杉林の道を辿りました。暗くジメジメした杉林は気分がいいものではなく、目的地もはっきりしない探検は不安がありました。それでも歩きやすかったので 20 分もすると杉林を抜け少し広葉樹林を横切ると沢に出ました。この沢が非常に特徴的な地形となっていて、両岸は切り立った岩壁、川底も岩でいわゆる函なのですが、川幅が狭いので石でできた樋のような感じです。水は浅いのでじゃばじゃばと下っていくと大小の滑滝があり、さらに下ると落差 10m ほどの滝もありました。両岸の岩にはツツジらしきものも多くあり、この辺かなあと思いつつ探しますが花の付いた木はなく目的のバイカツツジの有無はわかりませんでした。

前回は時期が悪かったのかと思い、今度は 9 月 25 日に S さんを誘って再トライしました。この時も経過は前回同様で、花をつけた木はなくどうも花期は終わっていたようでした。これがそうかなあと思いながら眺めていたツツジは後で思うとコヨウラクツツジが多かったようです。

これではいけないと思い、花がなくともわかるように美唄市にある林業試験場へ行きました。そこには道内の樹種をことごとく集めてあり、バイカツツジも 2 本ありました。これを覚えておけばと思っていたところ翌春には職場が林業試験場に変わり、この 2 本はいつでも見に行けるようになりました。これで開花時期を予想して現地確認をする素地ができました。

さて 2012 年は春から美唄でバイカツツジを観察しながら機会をうかがいました。7 月に入ると花が咲き始め中旬には満開になったので、この時とばかり昨年誘って空振りさせてしまった S さんを再び誘い 7 月 22 日に現地へ入りました。もう 3 回目なので函まではすんなりと到着します。少し下ると左から沢が合流してきます。そこは落差があって滑りやすいので一旦岩によじ登って隣の沢へ降りていきます。するとその岩の下流側に付いているバイカツツジをあっけなく発見できました。

バイカツツジは岩からほぼ水平に沢の方へと伸びています（図 1）。少し高いところに花があるのですが、見上げたりよじ登ったりして念願の花を観察しました。花は径 2cm ほどとツツジとしては小さく、葉の下側に付いているので控えめに見えま

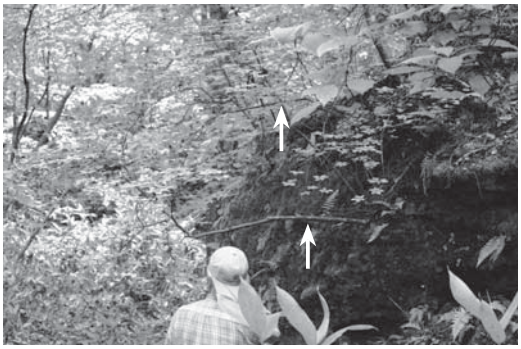

図 1　水平に生えたバイカツツジ（矢印）と S 氏
多くはこのような樹形で生育環境は樹林下だった。

図 2　葉と花の付き方　葉の傘をさしたのように
咲くので上からは見えづらい。

図 3　花のアップ
花は 5 弁で 3 枚の上弁に斑点がある。

す（図 2)。花は皿形で全体に白く、上弁に紫色の斑点が多数あります（図 3)。葉は枝先に集まって、やや輪生気味に互生します。

最初に見つけたところからさらに下っていくと、岩や崖の上に大きな株がいくつも見えました。どの株も水平に突き出すような懸崖でこの植物の特徴なのかもしれませんが、場所が高く足場がないのでなかなか間近に見ることができません。したがって個体数は結構あるように見えましたが、あまり正確には見ることができませんでした。

このようにして林道の下見も含めると足かけ 3 年、5 回にわたる探索の結果ようやく開花の様子と生育地の環境を確認できました。そもそもやや鬱蒼とした樹林下のうえ、当日の天候もあまりよくなかったので長居はせず、すでに薄暗くなりつつある杉林の中を満足して帰ってきました。

（北海道立総合研究機構林業試験場）

引用文献

Maximowicz. C. J. 1870. Diagnoses breves plantarum Novarum Japoniae et Mandshuriae. Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Petersbourg 15: 229.

五百川裕・倉重祐二・高橋英樹 . 2017. ツツジ科 . 大橋広好ほか（編）. 改訂新版日本の野生植物 4, pp. 224-262. 平凡社 , 東京 .